那　珂　73

— 第147次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1262集

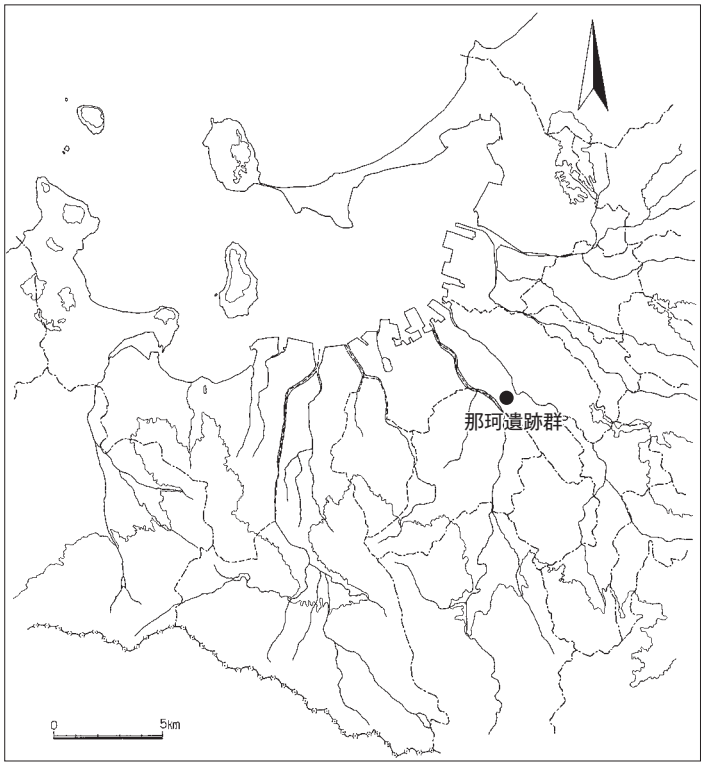
２０１５

福岡市教育委員会

那　珂　73

— 第 147 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1262 集



遺跡略号	調査番号
NAK-147	1330

2 0 1 5

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。なかでも旧那珂郡には、旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建築に伴う那珂遺跡群第147次発掘調査について報告するものです。この度の調査では弥生時代や中世の溝・土壙・井戸を検出し、遺跡が位置する丘陵の縁辺部における土地利用のありかたを示す貴重な資料を得ることができました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、近隣にお住まいの方々・事業主様をはじめとする関係者の皆様には発掘調査から本書の作成に至るまで深いご理解と多くのご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会
教育長　酒井　龍彦

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建築に伴い、福岡市博多区東光寺町１丁目 161 において実施した発掘調査である那珂遺跡群第 147 次発掘調査の報告書である。
2．本書に掲載した遺構実測図は阿部泰之が作成した。
3．本書に掲載した遺物実測図は平川啓治・阿部が作成した。
4．本書に掲載した挿図の製図は阿部がおこなった。
5．本書に掲載した写真は阿部が撮影した。
6．本書で用いた方位は特に断りなき限りすべて磁北で、真北から 6°30′ 西偏する。
7．遺構の呼称は溝を SD・井戸を SE・土壙を SK・ピットを SP と略称する。遺構番号は発掘調査の際、現場で任意に振った通し番号を特に断りなき限りそのまま用いる。
8．本書にかかわる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
9．本書の執筆・編集は阿部がおこなった。
10．本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成 26 年３月現在の推定線であり、現在は変更されている可能性がある。詳細は福岡市文化財部埋蔵文化財審査課に確認されたい。
11．本書で報告する発掘調査の細目は以下の通りである。

遺跡名	那珂遺跡群	調査次数	147 次	調査略号	NAK-147
調査番号	1330	分布地図図幅名	東光寺	遺跡登録番号	020085
申請地面積	392.62㎡	調査対象面積	204.96㎡	調査面積	178.5㎡
調査期間	平成 25（2013）年 10 月 17 日～平成 25（2013）年 12 月 3 日			事前審査番号	25-2-253
調査地	福岡市博多区東光寺町１丁目 161				

本　文　目　次

はじめに……1
　1．調査に至る経緯
　2．調査組織

第１章　位置と環境……3

第２章　調査の記録……7
　1．調査の概要
　2．遺構と遺物

第３章　まとめ……17

挿　図　目　次

Fig．1　那珂遺跡群と周辺の主な遺跡（1/25,000）……2
Fig．2　調査区位置図（1/4,000）……4
Fig．3　調査区位置図（1/1,000）……5
Fig．4　調査区全体図（1/100）……6
Fig．5　調査区南壁土層断面実測図（1/100）……7
Fig．6　SD05・08 実測図（1/60）……8
Fig．7　SD05 出土遺物実測図（1/3）……9
Fig．8　SK03・04 実測図（1/30）……10
Fig．9　SK04 出土弥生土器・土師器実測図（1/3）……11
Fig.10　SE07・12 実測図（1/30）……12
Fig.11　SE07・12 出土遺物実測図（1/3）……13
Fig.12　ピット出土遺物実測図（1/3）……14
Fig.13　遺物包含層出土弥生土器・土師器実測図（1/3）……15
Fig.14　遺物包含層出土須恵器・陶磁器・土製品・石製品実測図（1/3）……16
Fig.15　遺構検出面およびその他の遺物実測図（1/3）……17
Fig.16　調査区の位置と旧地形（1/1,000）……18

図　版　目　次

PL．1　調査区東半全景（西より）
PL．2　調査区南西部全景（東より）
PL．3　調査区北西部全景（東より）
PL．4　調査区南壁西側土層（南より）
PL．5　SD05（南より）
PL．6　SD05 土層（北より）
PL．7　SK03（西より）
PL．8　SK04（南より）
PL．9　SE07 土層（南より）
PL.10　SE07 完掘状況（南より）
PL.11　SE12（西より）
PL.12　SE07 出土瓦器椀

はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区東光寺町１丁目 161（敷地面積 392.62㎡）における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 25 年６月４日付で受理した(事前審査番号:25-2-253)。

これを受けて埋蔵文化財審査課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていること、平成 25 年７月５日に確認調査を実施し現地表面下 110～135㎝で遺構が確認されたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を重ねた。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅本体部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成 25 年９月 30 日付で事業主（個人）を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年 10 月 17 日から発掘調査を、翌平成 26 年度に資料整理・報告書作成をおこなうこととなった。

２．調査組織

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：文化財部埋蔵文化財調査課長　宮井善朗（25 年度）
常松幹雄（26 年度）
調査第１係長　常松幹雄（25 年度）
吉武　学（26 年度）

調査庶務：埋蔵文化財審査課　管理係　川村啓子

事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係長　加藤良彦（25 年度）
佐藤一郎（26 年度）
事前審査係主任文化財主事　佐藤一郎（25 年度）
池田祐司（26 年度）
事前審査係文化財主事　森本幹彦（25 年度）
板倉有大（26 年度）

調査担当：埋蔵文化財調査課調査第１係
（現・埋蔵文化財センター）　文化財主事　阿部泰之

本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成 26 年 3 月現在の推定線であり、現在は変更されている可能性があります。本文の内容に直接関わらない遺跡は一部省略しています。

Fig. 1　那珂遺跡群と周辺の主な遺跡（1/25,000）

1 那珂遺跡群　2 比恵遺跡群　3 山王遺跡　4 五十川遺跡　5 井尻 A 遺跡　6 井尻 B 遺跡　7 諸岡 A 遺跡　8 諸岡 B 遺跡　9 笹原遺跡　10 三筑遺跡　11 東那珂遺跡　12 那珂君休遺跡　13 板付遺跡　14 高畑遺跡　15 雀居遺跡　16 上牟田遺跡　17 下月隈 D 遺跡　18 美野島遺跡　19 東比恵三丁目遺跡　20 堅粕遺跡　21 博多遺跡群　22 住吉神社遺跡　23 堅粕遺跡

第１章　位置と環境

現在の福岡市の中心的位置を占める福岡平野は、背振山系から発した那珂川と牛頸・四王寺山地から発した御笠川とによって形成された沖積平野である。現在は市街地化が進み旧状はほとんど窺えないが、もとは広大な農村地帯であった。この平野はその中央部に春日方面から延びる低丘陵「須玖丘陵」が位置し、那珂川と御笠川の流域はこれによって画されている。本丘陵は雨水や河川による浸食作用によって多くの谷が複雑に入り組み、多数の独立丘に分かれている。その丘陵上には多くの遺跡が存在し、那珂遺跡群はその中で最も大規模な遺跡のひとつである。今回報告する第 147 次調査地は遺跡の北東縁辺部、遺跡が乗る丘陵と御笠川氾濫原の境界に近い位置にある。

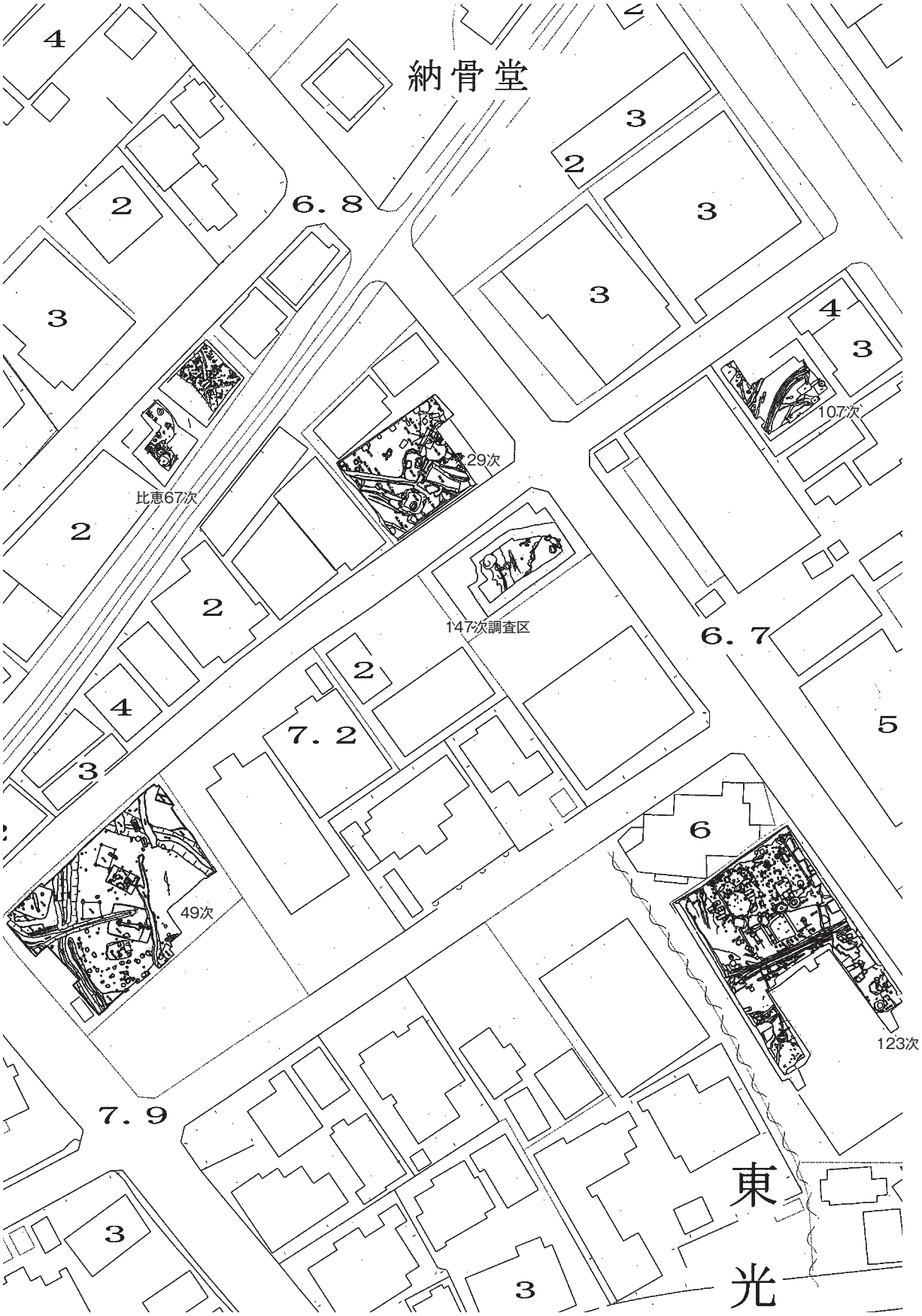
那珂遺跡群は、旧石器時代から近世にかけての遺構・遺物が検出されている複合遺跡である。北に隣接する比恵遺跡群とは鞍部をへだてているものの、連続する丘陵上に位置しており山王遺跡や南端に隣接する五十川遺跡を含めて一連の遺跡とみなしうる。以下、今回報告する第 147 次調査（以下、今次調査と呼ぶ）において検出・出土した遺構・遺物に関わる時期の那珂遺跡群の状況について、今次調査とその周辺の調査事例を中心に概観したい。

弥生時代の那珂遺跡群は、おおむね中期前半頃から遺構が増加し、後期前半～古墳時代初頭にかけて丘陵縁辺部にまで遺構の分布がみられ遺跡の最盛期を呈する。今次調査においても後期の土壙ないし井戸が検出されており、丘陵縁辺の湿地帯もなんらかの作業に利用されていたものと推測される。Fig．４に示す範囲での調査例で当該期の住居址は確認されておらず居住域がここまで拡大するのは古墳時代初頭まで下るのかもしれない。遺物は遺構面上に堆積する包含層が残る調査区では多く出土するため、後期の住居址群はより標高の高い西方に位置すると考えられる。このほか 49 次調査地点で終末期の溝が検出されている。

中世には遺跡の各所に溝による区画が検出され、屋敷地と推測される。今次調査南方の 123 次調査区では中世前半期の溝と井戸・土壙・柱穴列が検出され、溝で略方形に区画された空間の存在が予想されている。西方に位置する 49 次調査区では 13 世紀初頭の木棺墓２基と同時期の溝３条が検出され、屋敷地を区画する溝とその中に営まれた屋敷墓と考えられている。比恵遺跡群第 67 次調査地では 13 世紀代の溝状遺構と柱穴が検出された。本調査地周辺、遺跡が位置する丘陵の北東縁辺部では、中世前半期に溝で区画された屋敷地が点在していた状況が窺える。付近には彼らが経営した水田の存在が想定されるが、位置の特定は困難である。

中世後半になると前半期の溝よりさらに広く深い溝が検出される。今次調査でも調査区を南北に貫く溝を検出しており、堆積層の観察から水路と判断した。調査区壁の土層からは埋没後もおおむね同じ部分に新たな溝を掘りなおしている状況が観察できた。本調査地の北に隣接する 29 次調査区では中世中頃～後半代の土壙ないし井戸・地下式横穴が検出され、集落ないし屋敷地の一部の状況を呈する。これに関連し今回の調査でも井戸が２基検出された。しかし何れも溝に切られており、29 次調査検出の土壙群より先行し中世でも前半代まで遡る可能性がある。当該期の溝には、水路となるものの他に屋敷地の区画溝と考えられるものが主に丘陵高所でみられ、南に隣接する五十川遺跡でも同様の溝が検出されている。文献資料からは大内氏家臣に関わる知行宛行に那珂や五十川地域が充てられたことがわかっており、これらの溝は彼らの屋敷を区画していたものの可能性が高い。溝は起伏の多い丘陵の地形を活用して構築されており、区画整理がなされていない地域では現在も当該期の地割の痕跡が一部の街区に見て取れる。

Fig. 2　調査区位置図（1/4,000）



Fig．3　調査区位置図（1/1,000）

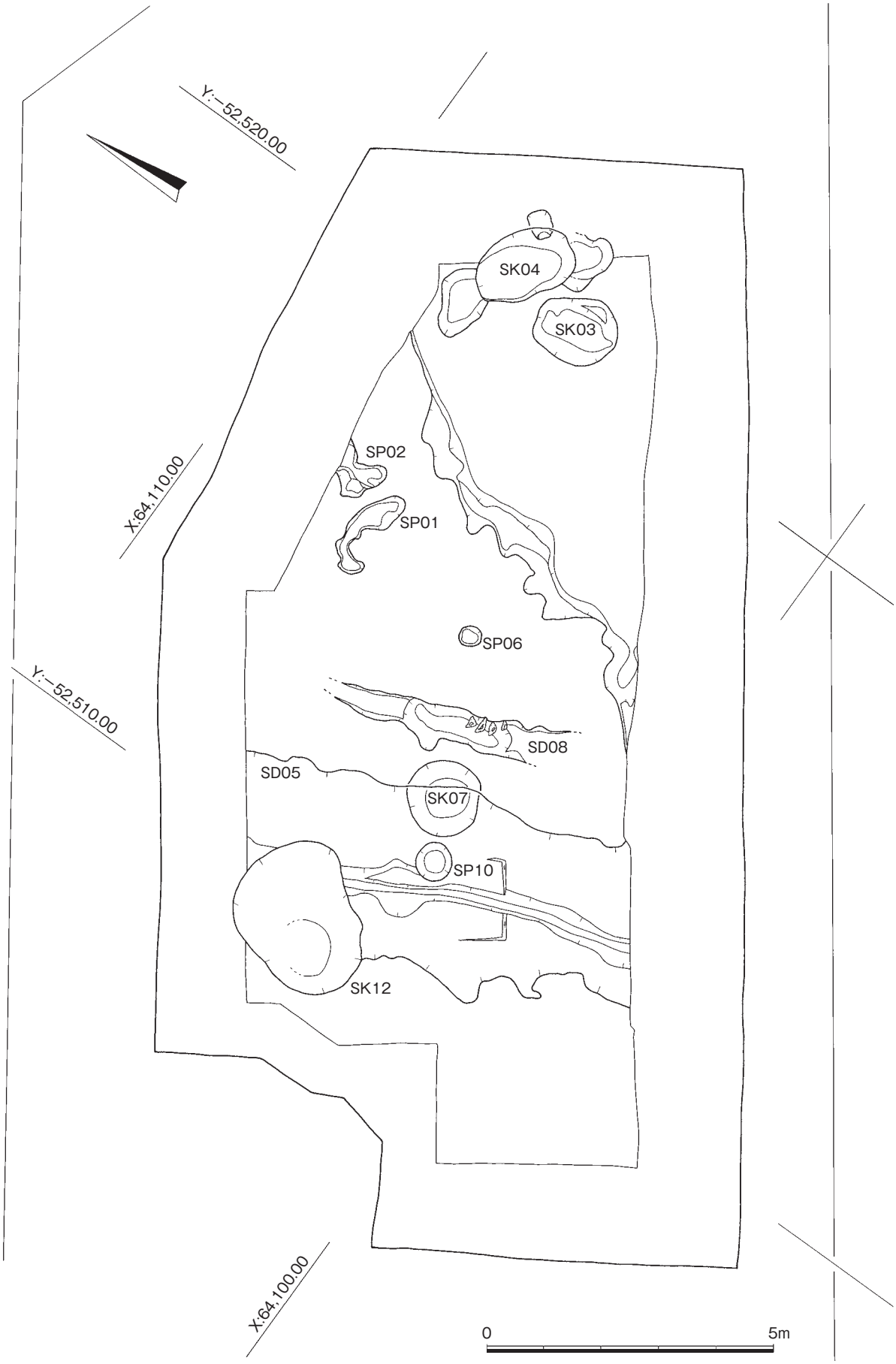


Fig. 4　調査区全体図（1/100）

第２章　調査の記録

１．調査の概要

今回の調査地は遺跡の北端部、北に隣接する比恵遺跡群との境界付近に位置する。現況は宅地で、現状では旧地形は窺えない状況である。

今回の調査は、10 月 10 日に事業者との最終的な現地確認をおこなうことから始まった。同月 17 日に現場に器材を搬入、翌日に重機を投入し１回目の機械掘削を実施した。その後 11 月５・６日に第２回、同月 18 日に第３回の残土反転、同月 28 日に埋め戻し、12 月３日に器材を撤収し発掘調査を終了した。遺構面は現地表面下 110～150㎝、黄白色～灰白色八女粘土上である。遺構面は西から東に向かって緩く傾斜する。調査区の東側で東西方向の緩い段落ちを検出し、そこに黒褐色の遺物包含層が堆積する。

今回の調査で検出した遺構は、溝１条・土壙ないし井戸３基・柱穴２基である。出土した遺物から、溝は 15 世紀代に埋没していると推測される。埋土には砂礫層が観察され、水路としての機能が想定される。土壙は何れも湧水が多く、井戸の可能性が高い。うち１基は弥生時代後期、２基は中世まで下るものとみられる。中世に属する２基は溝に切られ、溝よりは古い時期に廃絶したものと考えられる。

２．遺構と遺物

①溝（SD）

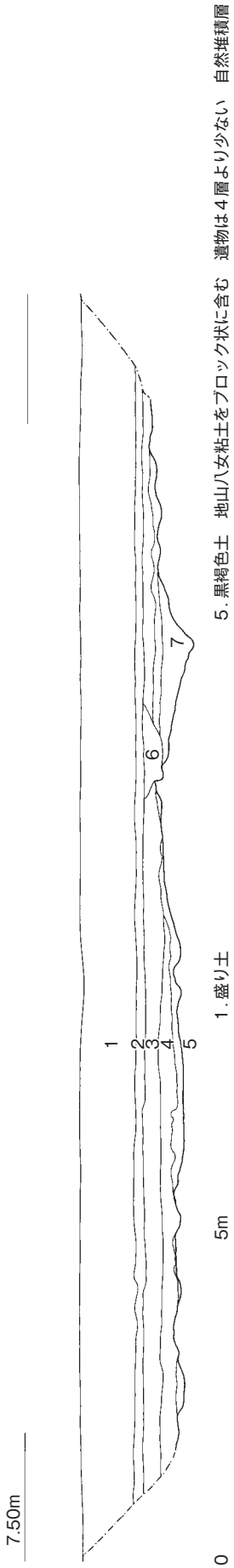
SD05（Fig．６）

調査区中央部を南北に貫流する溝である。後述する SE07・12 を切る。幅 2.3～３ｍ、深さ 50㎝を測り、延長 7.2 ｍにわたり検出した。

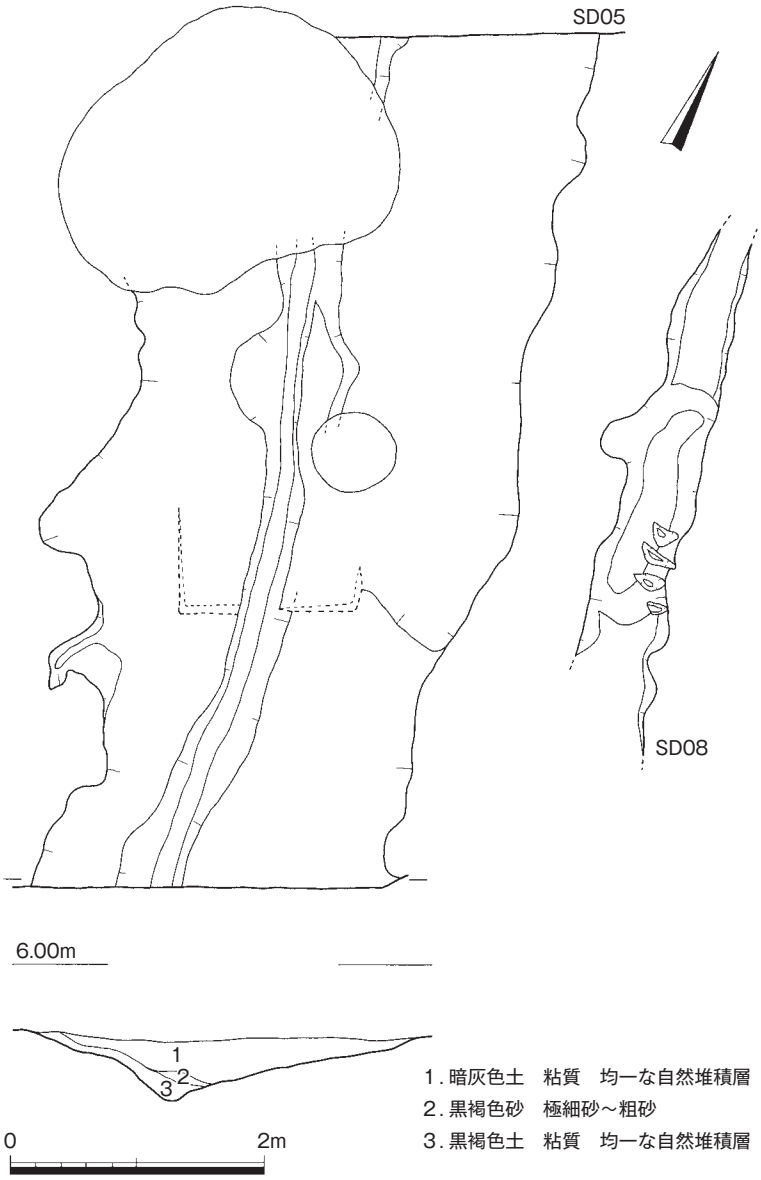
壁面は中央に向かって緩く傾斜し、中央部は幅 40～100㎝の幅で深く掘り下げられており、断面は不整な Y 字形ともいえる。底面からは常に水が浸みだす状況である。

土層断面図を Fig．６に示す。埋土は大きく２つに分けられ、上層は暗灰色土、下層は黒褐色土で何れも粘質土である。２層の間は不整合となり、少なくとも１回の掘り直しがなされている。上下両層の境界には砂層が観察でき、流水していたことがわかる。

本遺構は調査地周辺の水田化に伴い開鑿された水路であろう。



Fig．５　調査区南壁土層断面実測図（1/100）



Fig．6　SD05・08 実測図（1/60）

出土遺物（Fig．7）

１～３は土師器である。１は鍋。口縁部の小片で外面下部に煤が付着する。２・３は坏。何れも口縁部を欠く小片で、外底面には回転糸切り痕が残る。４は瓦質土器である。底部を欠く釜の小片で、口径 16.0cmに復元される。器壁は摩滅し、外面に齧歯類の噛み痕がみられる。５は備前陶器の擂鉢である。口縁部の小片で、口径 29.0cmに復元される。焼成は良好で堅緻である。

６・７は白磁である。何れも碗。底部の小片で、６は底径 6.7cm、７は底径 5.5cmに復元される。７の外底面には１字の墨書が残存するが判読は困難で、花押の可能性もある。

8～12 は龍泉窯系青磁碗である。何れも碗で、８～11 は底部の小片である。８は体部を人為的に割取っており、瓦玉と推測される。９にもその可能性があり、見込みは使用によって摩滅する。10 は底径 5.6cmに復元される。11 は濃緑色の釉が厚く掛けられ、外底面の釉を輪状に掻き取る。底径は 7.2cmに復元される。12 は口縁部の小片で、口径 14.4cmに復元される。13 は高麗青磁である。碗の小片で、内外両面に白土による象嵌が施される。

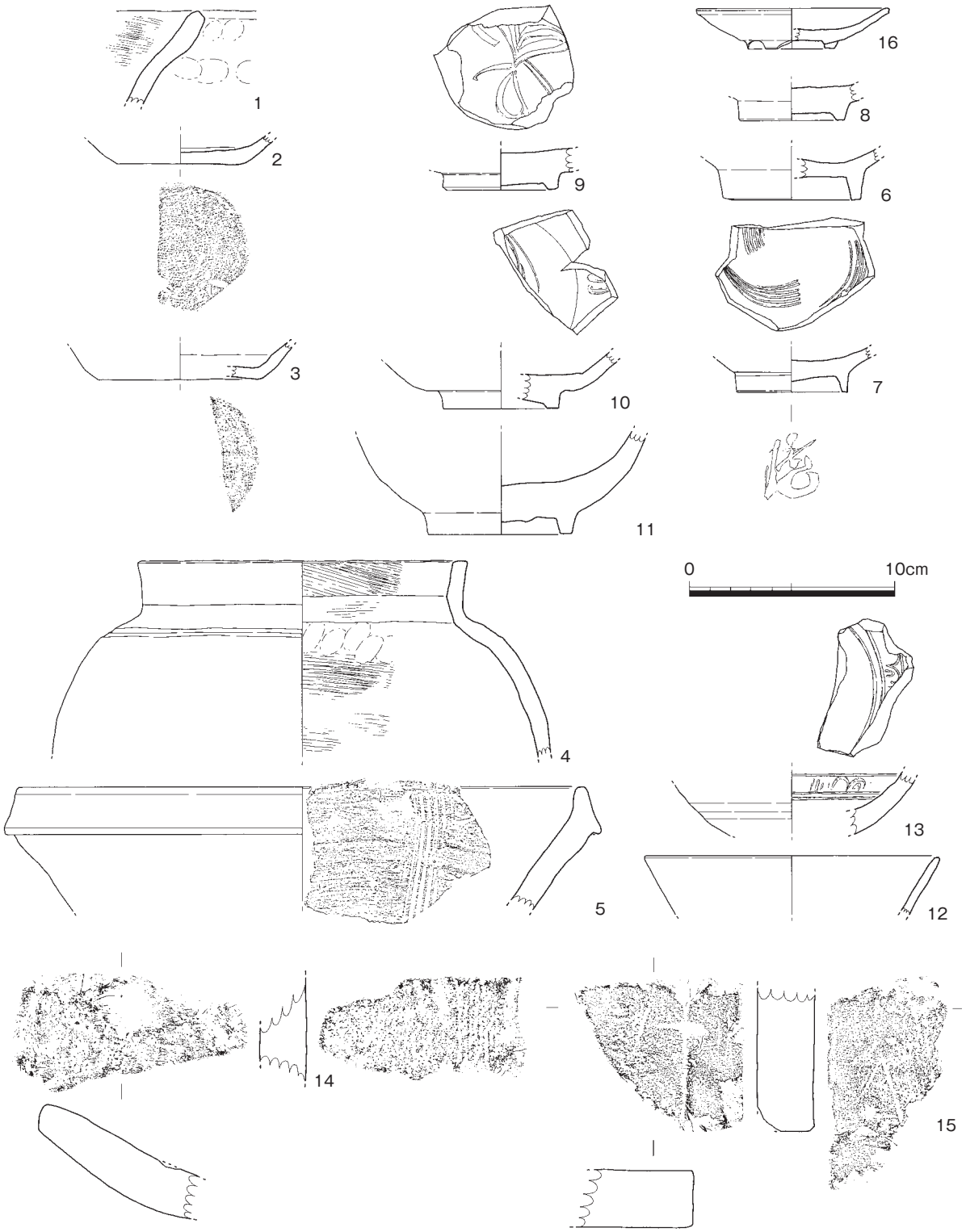


Fig. 7　SD05 出土遺物実測図（1/3）

14・15 は瓦である。何れも平瓦の小片で、器壁は灰白色～橙色を呈し焼成は不良である。

SD08（Fig. 6）

調査区中央部、SD05 に平行する溝である。近代以降の水田開鑿時に大きく削られており、全長 120cm、深さ 11cmと残りは悪い。底面に三日月ないし半月形のくぼみが複数検出され、鋤状の工具で

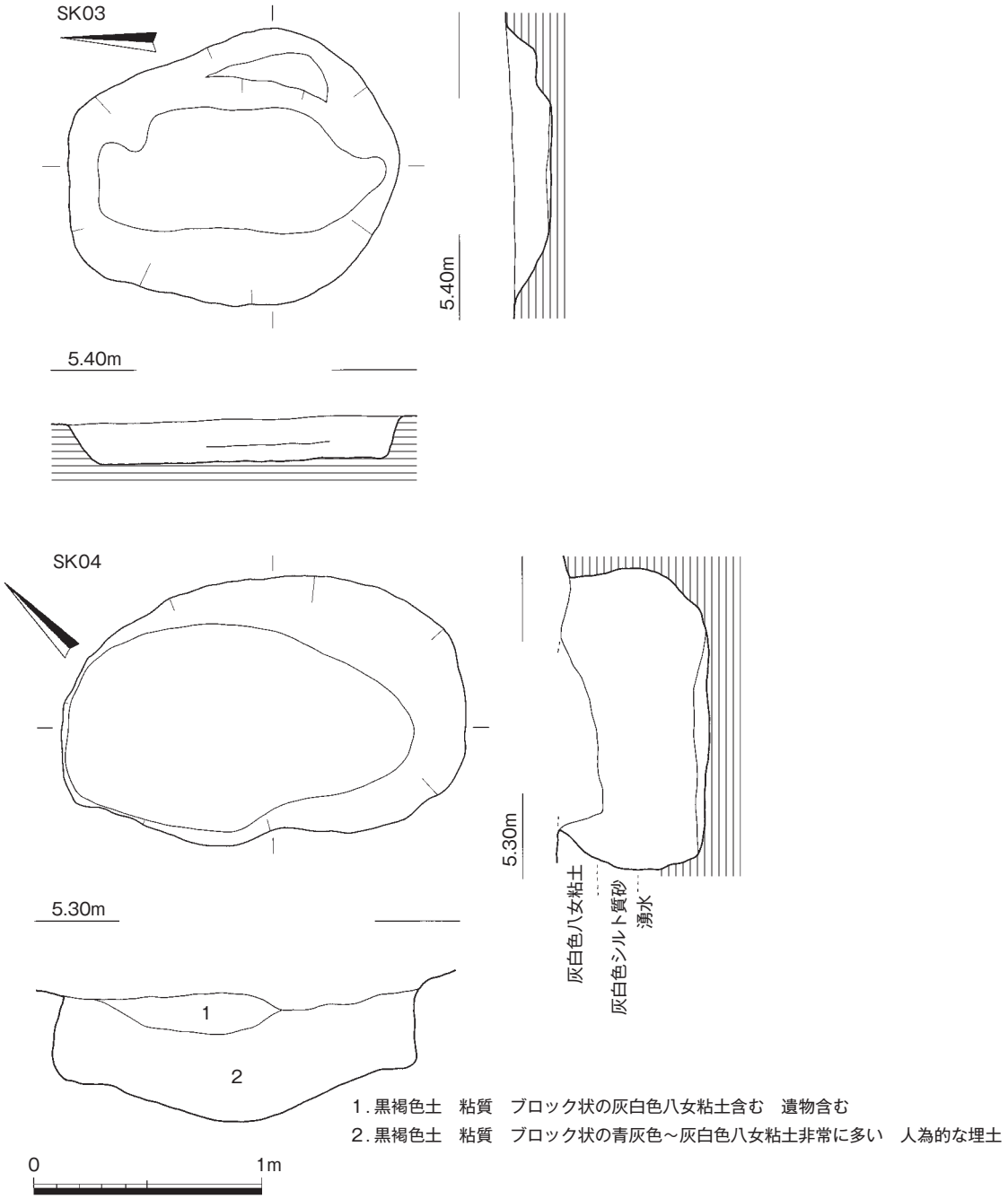


Fig. 8　SK03・04 実測図（1/30）

掘削した痕跡と推測される。埋土は黒褐色土で均一に堆積しており自然堆積である。

方位・埋土の状況とも SD05 に類似しており、SD05 を掘り直した際の単位のひとつと推測される。

遺物は出土しなかった。

②土壙（SK）

SK03（Fig. 8）

調査区東端部にて検出した。不整な楕円形を呈する土壙で、深さ 15～20cmと浅く平面・断面形とも不整で遺構ではない可能性が高い。埋土は黒褐色土で、八女粘土のブロックが多く混じる。

遺物は弥生土器・土師器が出土しているが、小片であり図示していない。

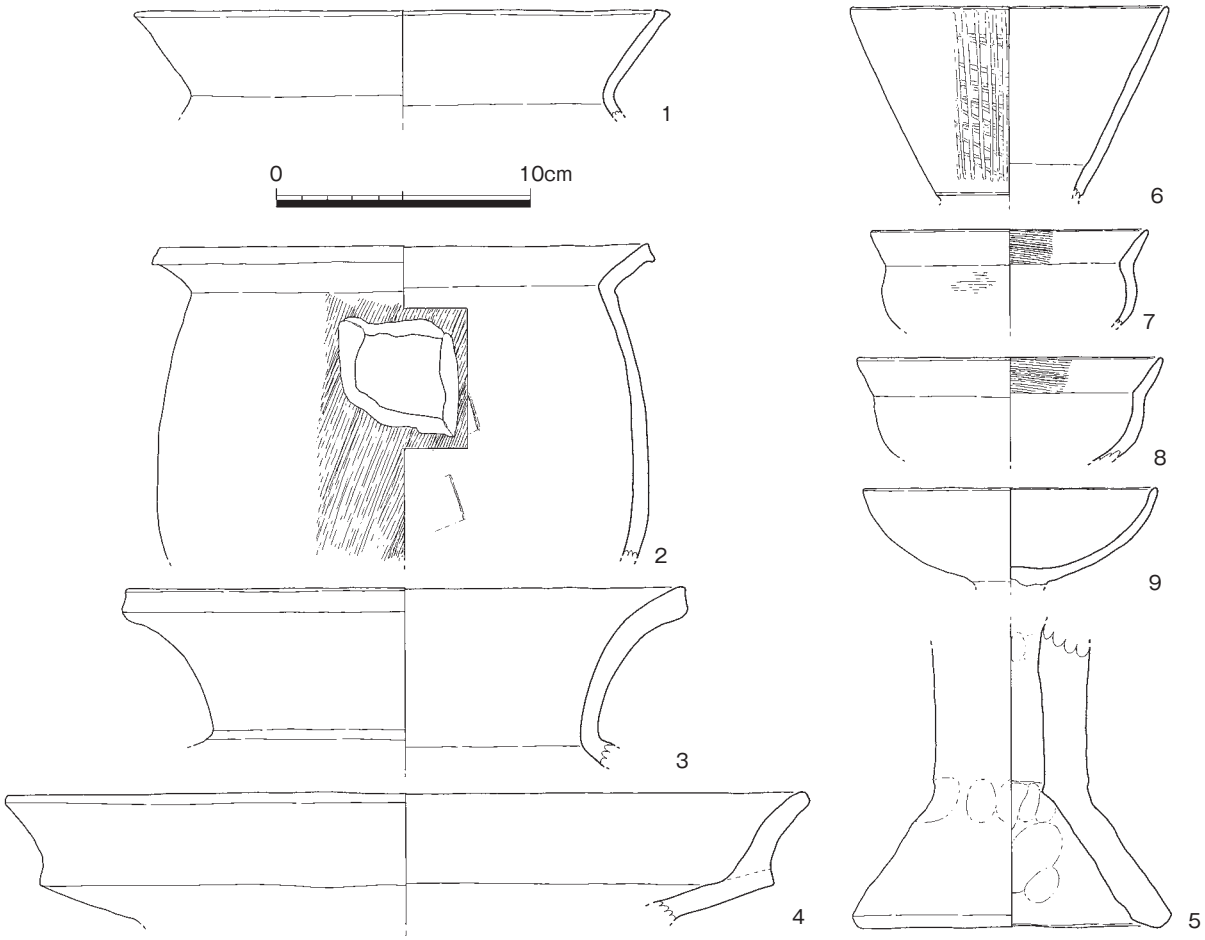


Fig. 9　SK04 出土弥生土器・土師器実測図（1/3）

SK04（Fig. 8）

調査区東縁辺部にて検出した。楕円形を呈する土壙である。井戸の可能性もあるが暫定的に土壙として報告する。灰白色八女粘土上で検出したが、この地山自体が中世の段階で切り下げられている可能性もあるため、本来はさらに深かったとも考えられる。

本遺構は深いところで 60cmを測り、検出面から 35cmのレベルで湧水する。そのためか壁面はオーバーハングし断面形状は袋状を呈する。

埋土は黒褐色土で非常に粘性が強く掘り下げにくい。八女粘土のブロックを多く含みとくに第１層は人為的な埋土と推測される。

出土遺物（Fig. 9）

１は土師器甕である。口縁部の小片で、口径 21.0cmに復元される。２・３は弥生土器甕である。底部を欠く小片で、胴部上半に焼成後、内面から穿孔しており、口径 19.8cmに復元され、外面には煤が付着する。穿孔した孔の断面に煤は付着しておらず、煮炊きに用いたのちに穿孔したことが窺える。３は口縁部の小片で、口径 22.2cmに復元され、４は弥生土器高坏ないし壺の口縁部である。小片で、口径 31.6cmに復元され、５は器台か。上部を欠く小片で器壁は厚い。底径 12.6cmに復元され、残存高 12.0cmを測る。

６～９は土師器である。６は小形精製器種の直口壺である。胴部を欠損する小片で、口径 12.6cmに復元され、残存高 7.6cmを測る。外面は黒色顔料を塗布したものかやや黒色味を帯び、密なヘラミガ

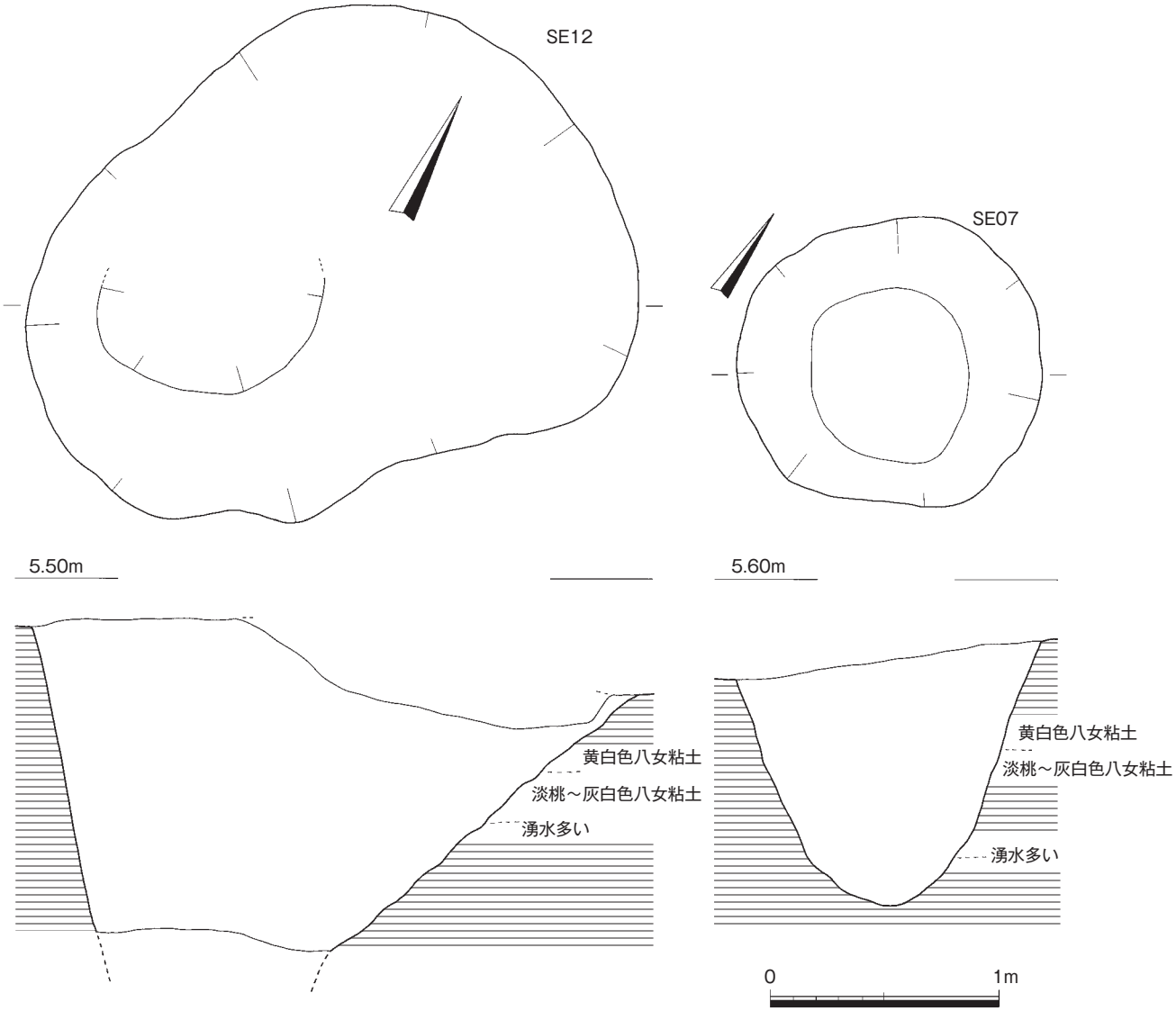


Fig.10　SE07・12 実測図（1/30）

キが施される。７・８は小形丸底壺である。何れも底部を欠く小片で、器壁は摩滅し調整は不明瞭である。７は口径 11.0cmに復元され、８は他の土師器に比して薄く作られる。口径 12.0cmに復元され、９は小形の脚付鉢である。脚部を欠く小片で、口径 11.6cmに復元され、器壁はやや黒ずみ６同様黒色顔料を塗布したものか。

③井戸（SE）

SE07（Fig.10）

調査区中央部にて検出した。SD05 に切られる。径 140cmを測る円形の土壙である。

断面形は砲弾形を呈し、深さ 120cmを測る。遺構検出面から約 100cmのレベルで多量に湧水するため井戸と判断した。

埋土は黒褐色土で、非常に粘性が強くきわめて掘り下げにくい。検出面から約 30cm以下は八女粘土のブロックが埋土の大半を占める。井筒等の痕跡は確認できなかった。本遺構は SD05 を開鑿する際に人為的に埋められたものと推測される。

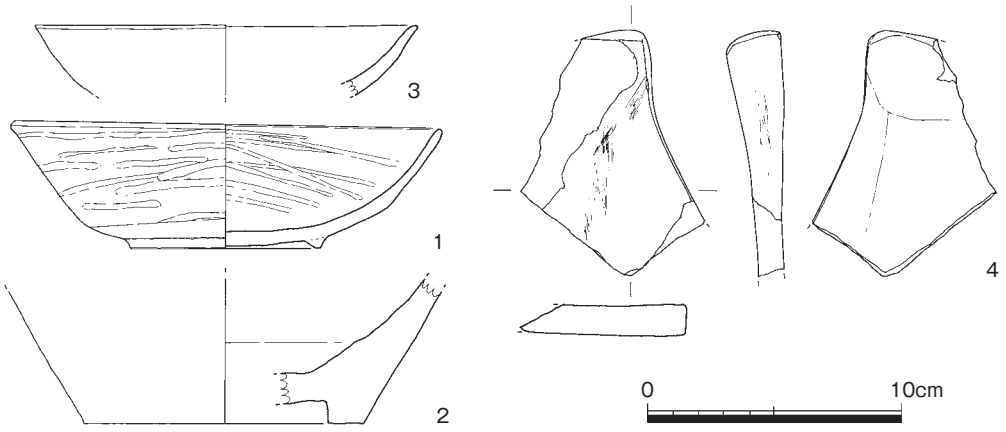


Fig.11　SE07・12 出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.11）

遺物の出土量は少なく、総量で 13 号のビニール袋１袋である。

２・３が SE07 出土。１は瓦器である。遺構の壁面に近接して割れた状態で出土した。復元したところ口縁部の一部が直線的に欠損しており、破片が出土しなかったことからこの部分を人為的に打ち欠いたのち割って本遺構に投げ込んだものと推測される。全体の約 80％が残存する椀で、口径 17.0cm・器高 5.0cm・底径 7.4cmを測る。内外両面とも粗なヘラミガキにて仕上げられ、重ね焼きのためか口縁部にのみ燻しがかかる。胎土は精良で焼成は良好である。

２は褐釉陶器である。壺の底部で、小片であり底径 11.0cm・残存高 5.7cmを測る。内外両面に薄く施釉されるが、全体に焼成が不良で発色していない。

SE12（Fig.10）

調査区北西部にて検出した。SD05 に切られ、南西―北東方向に長軸を持つ不整な楕円形を呈する。

長径 2.8 m・短径 1.7 mを測る。断面形は北側が緩やかな斜面となり、南側は急でほぼ垂直に立ち上がる。

遺構検出面から 90cmのレベル、八女粘土の色調が変化する境界から多量に湧水する。これにより壁面が崩落し始めたこと、調査区際で検出したため現地表面との比高差もあり作業員の安全が確保できなかったことから遺構検出面-1.5 mのレベルで掘り下げを断念した。埋戻し時に重機で掘り下げたところ、人力での下げ止めレベルから下はほぼ直径１mの円形で垂直に掘削されており、現地表面下約５mで底面に達した。井筒等の痕跡は確認できなかった。

埋土は黒褐色土で樹枝・ブロック状の地山八女粘土を含む。ほぼ八女粘土のみで構成される層と互層に堆積し、人為的な堆積層である。

SE07 同様、SD05 開鑿時に人為的に埋めたものと推測される。

出土遺物（Fig.11）

遺物の出土量は SE07 よりさらに少なく、図示したものがすべてである。

３は土師器である。坏の口縁部で、小片であり口径 15.0cmに復元され、残存高 2.7cmを測る。器壁は摩滅し調整は不明瞭である。４は砥石である。小片で、３面に使用面を残す。残存長 9.7cmを測り、重量 111.0ｇを測る。灰褐色を呈する粗めの砂岩を石材とし、薄く使用による摩滅が顕著である。

④ピット（SP）

今回の調査では、明瞭に建物や住居址を構成すると考えられる柱穴は検出されなかった。大半の

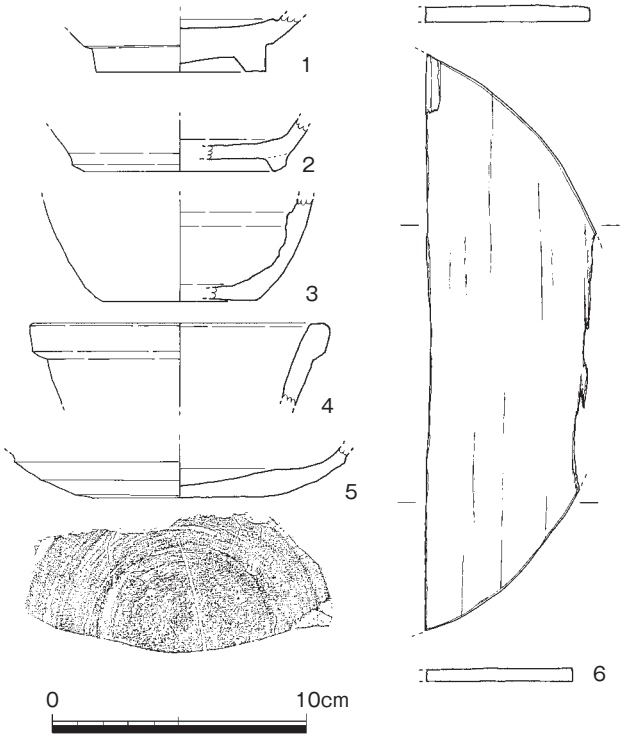


Fig.12　ピット出土遺物実測図（1/3）

ピットは平面・断面形とも不整で、遺構ではない可能性が高い。うちSP06・SP10は平面形・断面形とも明瞭で柱穴の可能性が高い。以下、実測可能な遺物を抽出し報告する。

出土遺物（Fig.12）

1は白磁である。SP10から出土した碗の底部で、体部は人為的に打ち欠き、瓦玉となしている可能性がある。高台部は露胎で、底径6.7cmを測る。

2～5は須恵器である。2はSP01から出土した。口縁部を欠く坏の小片で、底径8.4cmに復元され、残存高2.0cmを測る。3は瓶または壺である。底部の小片で、外底面には1方向からヘラ状の工具で切り離した痕跡が残る。底径6.0cmを測る。4は甕である。口縁部の小片で、器壁は黄白色を呈し焼成は不良である。口径11.8cmに復元される。5は坏である。暫定的に身として報告する。底部の小片で、径6.8cm、高さ2.1cm分が残存する。内面は暗赤色を呈し、外面は右回りの回転ヘラ削りが施され、ヘラ記号を有する。

6は曲げ物の底板である。SP10出土。底面に寝かせた状態で出土しており、礎板として用いたものか。針葉樹か、木目の詰まった板材を用い、厚さ6㎜を測り、径24.8cmに復元される。片面は被熱により炭化し、側縁には留め釘の孔が残る。木目の方向に割れており、全体の1/5程度が残っている状態である。

⑤遺物包含層

今回の調査では、調査区のほぼ全面、遺構検出面の黄白～灰白色八女粘土上に黒褐色土が堆積していた。この層は下部の八女粘土との境界付近を除きほぼ均一で、自然堆積層と推測されるが、ここに弥生時代後期を主体とした遺物が含まれており、遺物包含層として報告する。以下、掘り下げ時に出土した主な遺物について説明を加える。

(Fig.13) 1～7は弥生土器である。1は短頸壺である。口縁部の小片で、口径16.0cmに復元され、残存高4.2cmを測る。2・3は甕である。何れも口縁部の小片で、2は口径18.4cmに復元され、残存高6.9cmを測る。3は口径27.0cmに復元されるが小片のため不正確、残存高4.8cmを測る。4は甕である。底部を1/2残す破片で、底面には焼成後、外面から穿孔する。甑として用いたものか。底径9.8cmに復元され、残存高12.3cmを測る。5は蓋の頂部である。径5.6cm・残存高2.2cmを測る。6は壺か。底部のみ残る破片で、外底面はわずかに平面を残す。底径2.7cm・残存高3.3cmを測る。7は器台である。終末期の大型の個体で、口縁部と底部を欠く小片である。頸部で径8.3cmに復元され、残存高10.0cmを測る。

11～15は土師器である。11は移動式竈である。底部の小片で、残存高5.2cmを測る。器壁は粗くナ

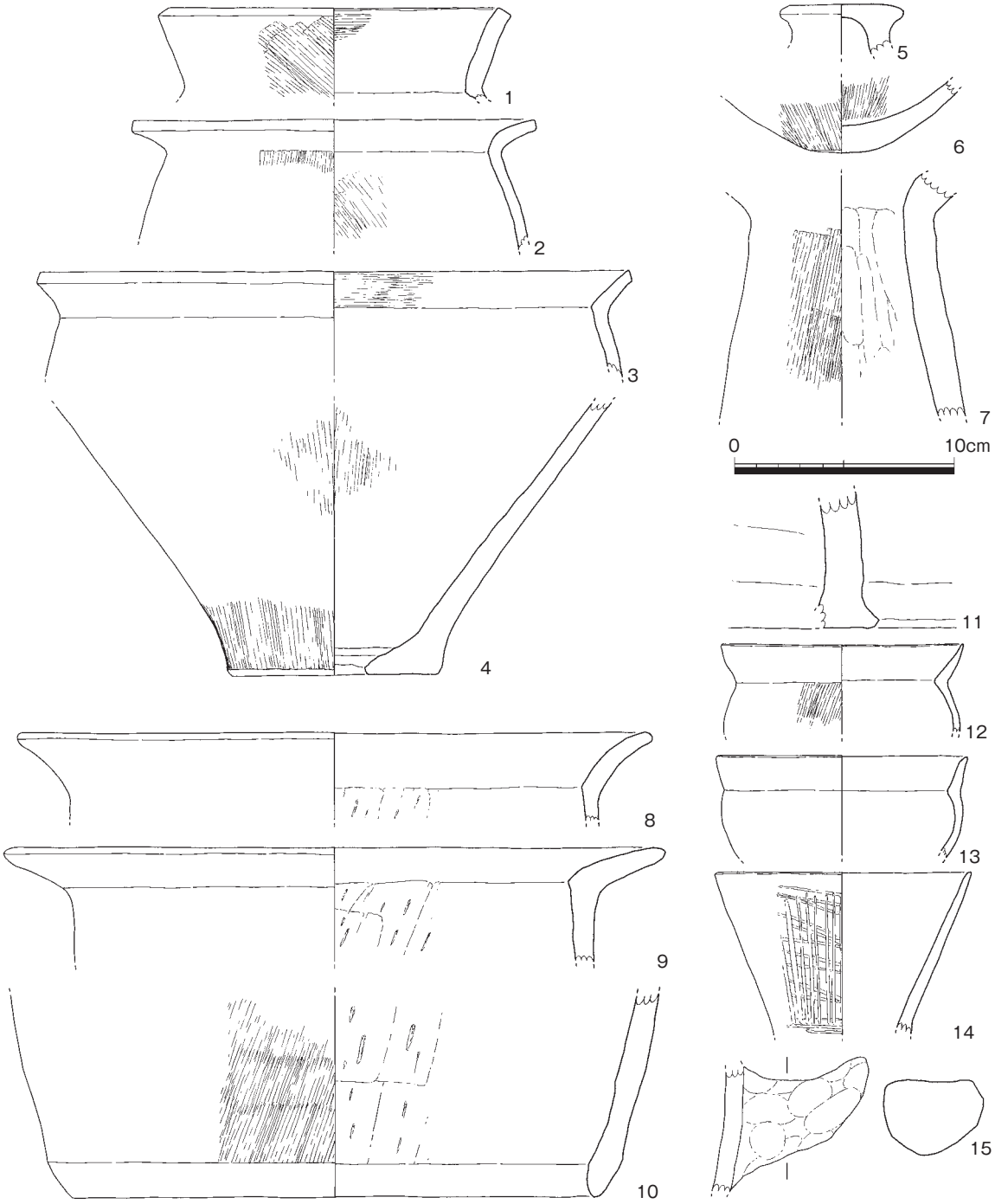


Fig.13　遺物包含層出土弥生土器・土師器実測図（1/3）

デて仕上げられる。12・13は小形丸底壺である。何れも底部を欠く小片で、外面には煤が付着したものか、黒色の部分が観察される。12は口径11.0cmに復元され、残存高4.0cmを測る。13は口径11.6cmに復元され、残存高4.2cmを測る。14は小形精製器種の直口壺である。胴部を欠く小片で、口径11.6cmに復元され、残存高7.4cmを測る。外面には暗褐色を呈する部分がみられ、何らかの顔料を塗布している可能性がある。

(Fig.14)　１～８は須恵器である。１は船徳利か。胴部の小片で、底径18.8cmに復元され、残存高9.7cmを測る。器壁には自然釉がかかる。２は甕である。口縁部の小片で、口径24.6cmに復元され、

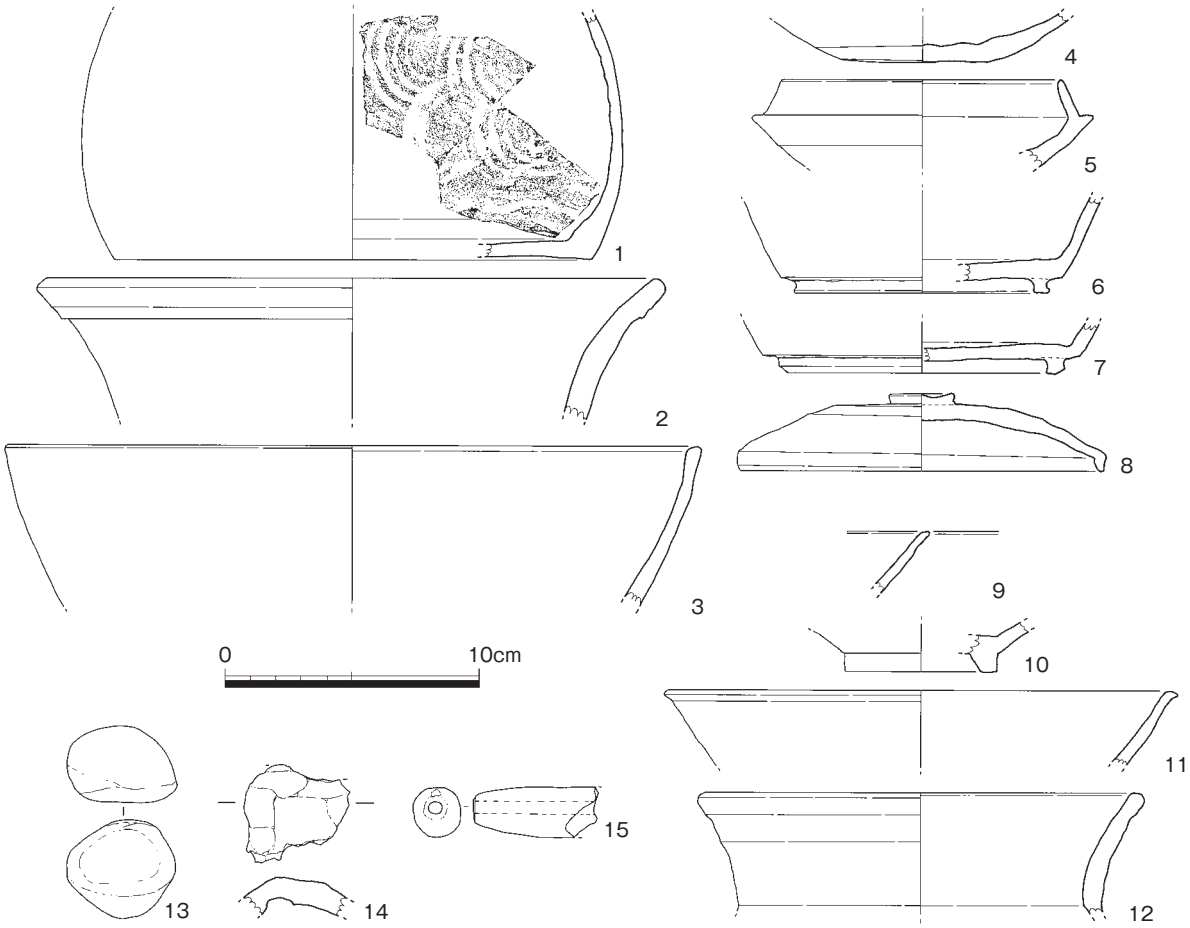


Fig.14　遺物包含層出土須恵器・陶磁器・土製品・石製品実測図（1/3）

残存高5.6cmを測る。器壁に自然釉がかかる。３は鉢か。中世の須恵質土器の可能性がある。口縁部の小片で、口径27.4cmに復元される。焼成はやや不良で断面灰白色を呈する。4～7は坏身である。4は底部の破片で、外底面のヘラ削りは右回りである。５は口縁部の小片で、口径13.4cmに復元される。６・７は底部の小片。６は底径10.0cmに復元され、焼成はやや不良である。７は底径11.2cmに復元される。８は蓋である。ほぼ完形に復元できた。口径14.6cm・器高3.1cmを測り、天井部外面のヘラ削りは右回りである。内面の一部に摩滅する部分があるが、墨の痕跡はない。

９～11は白磁碗である。９は口縁部の小片。10は底部の小片で、底径6.0cmに復元される。外面は露胎。11は越州窯系青磁碗である。口縁部の小片で、口径20.0cmに復元される。使用による摩滅のため釉薬の光沢は失われている。

13は磨石か。チャート様の円礫で、表面の凹凸はほとんどなくなめらかである。長径4.3cmを測り、重量62.7ｇを測る。14は鞴羽口である。小片で被熱の痕が顕著である。残存長3.9cmを測る。15は土錘である。1/2個体残存する破片で土師質である。残存長4.9cm・重量17.8ｇを測る。

⑥その他の遺物

遺構検出面およびその他の遺物で、主なものを図示した。

(Fig.15) １は移動式竈の口縁部か。遺構検出面出土で小片で庇部を欠損する。２～４は須恵器である。何れも遺構検出面出土。２・３は坏である。２は底部の小片で底径10.0cmに復元される。３は

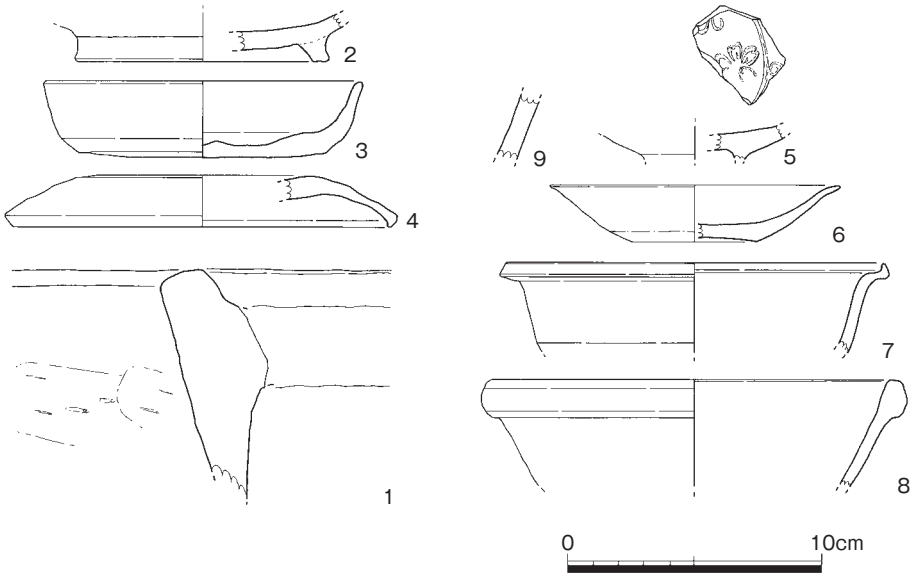


Fig.15　遺構検出面およびその他の遺物実測図（1/3）

1/5 個体残存する破片で、口径 12.2cmに復元され、器高 3.0cmを測る。外底面には不定方向のヘラ切り痕が残る。４は蓋である。天井部を欠く小片で、口径 15.4cmに復元される。

５は高麗青磁である。碗か。調査区壁面出土、底部の小片で高台部を欠く。内面に白土で花文を象嵌し、暗緑色の釉を施す。６～８は白磁である。６は皿である。調査区壁面出土。1/2 個体残存する破片で、口径 11.4cmに復元され、底径 11.4cm・器高 2.2cmを測る。７は小形の鉢か。口縁部の小片で口径 15.4cmに復元される。８はⅣ類の椀である。口縁部の小片で口径 16.8cmに復元される。9 は試掘時に出土した。磁竈窯産陶器の可能性もあるが不確実である。淡褐色の胎土で両面に淡緑～濃緑色の釉が掛かるもの。

第３章　まとめ

今回の調査では、溝や井戸は検出されたが掘立柱建物跡等は検出されず、中世集落の縁辺部を調査したものと推測される。

今次調査区の遺構面は現地表面下-1.4 m、標高５m前後の灰白色八女粘土上である。道路を挟んで北に位置する第 29 次調査区遺構面はロームであり、本調査区は遺構面にして約１m低い。小規模な谷が入る可能性もあるが、遺構面は平坦であり人為的に削られているものと推測され、旧地形の復元は困難である。

今回の調査で検出されたもっとも古い遺構は土壙 SK04 で、出土遺物から古墳時代前期前半まで遡るものと推測される。遺構内が常時地下水で満たされる環境にある遺構で、井戸の可能性は高いが現場では確証を掴めなかった。

これらの遺構の上に堆積する黒褐色の包含層には一定量の須恵器が含まれ、８世紀代の坏が目立つ。当該期に遺跡が乗る比恵の台地に何らかの施設があった可能性がある。

調査区北東部には地山の落ちが確認でき、遺物を含む黒褐色土が堆積していた。これには白磁・竜泉窯系青磁等が含まれ、堆積時期は後述する SD05 埋土の上に堆積していることから 15 世紀までは

下るものと推測される。したがって地山の落ちが形成された時期はそれ以前、ということになる。水田化のための切り下げと推測されるので、井戸を有する集落があった高所を切り下げ、水路を引いて水田となしたものであろう。井戸の時期はSE07出土の瓦器椀から11世紀後半頃と推測され、SE12もそう離れた時期の遺構ではないと思われる。

今回の調査区中央に検出した溝SD05は水田に水を引く水路と考えられる。掘り直しが認められるものの、最終的な埋没の時期は出土遺物から15世紀代とみられ、完全埋没後に遺物包含層の黒褐色土が堆積していることから、この溝をはじめ周辺の土地はしばらくの間放置され、湿地の状態であったと推測される。ただしその状態はながく続かなかったようである。

というのも、試みに昭和初期の地形図に今回の調査区をあてはめると、地形図にある水路が今次調査検出の中世水路に重なるのがわかる。現在は区画整理がなされ戦前の地形図にあった水路は街区に合わせて切り替えられているが、調査区壁の土層観察からも今回検出の中世水路埋没後、その上に近・現代の水路が構築されている状況が観察できた。水路は常時浚渫等のメンテナンスがなされるため、開鑿の時期はさらに古くなろう。

このことから、中世にできた水路に基づき、一時放置されていた時期はあるものの同じ位置に繰り返し水路が再構築され、地割りが残り、戦前から戦後しばらくまでは中世以来の景観が保たれていたものと推測される。

Fig.16　調査区の位置と旧地形（1/1,000）

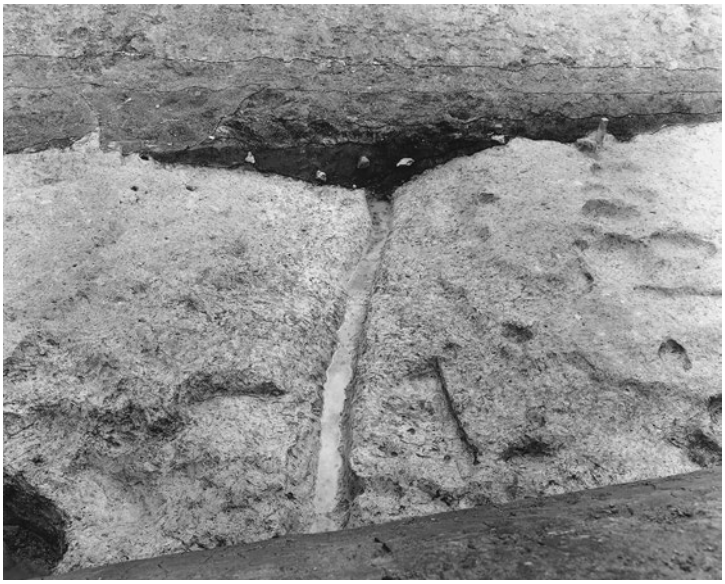
1．調査区東半全景（西より）

2．調査区南西部全景（東より）

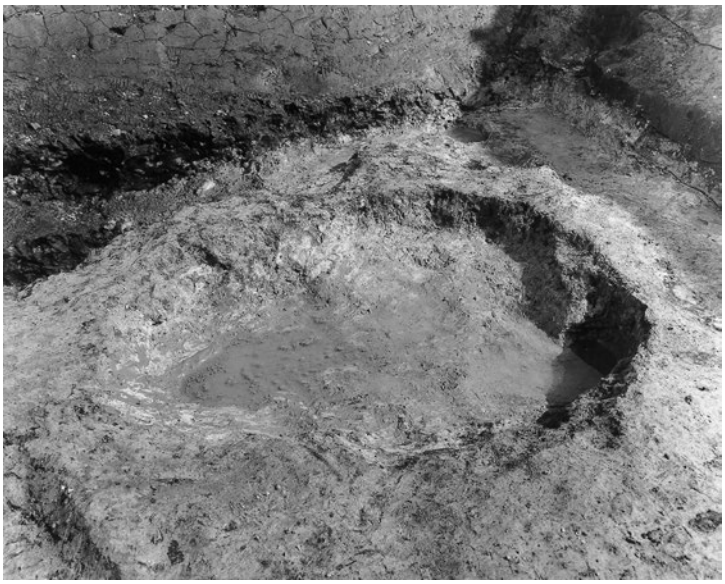
3．調査区北西部全景（東より）

4．調査区南壁西側土層（南より）

5．SD05（南より）



6．SD05 土層（北より）



7．SK03（西より）

8．SK04（南より）

9．SE07 土層（南より）

10. SE07 完掘状況（南より）

11. SE12（西より）

12. SE07 出土瓦器椀

報告書抄録

ふりがな	なか
書名	那珂　73
副書名	第147次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1262集
編著者名	阿部　泰之
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8622　福岡市中央区天神一丁目８番１号　　TEL（092）711-4667
発行年月日	平成27年３月25日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
那珂遺跡群（なか）	福岡市博多区（ふくおかしはかたく）東光寺町（とうこうじまち）1丁目161番	40132	0085	33°34′36″	130°26′4″	2013･10･17～2013･12･3	178.5㎡	共同住宅建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
那珂遺跡群	集落	弥生 中世	溝・土壙・井戸	弥生土器・須恵器・陶磁器	

要約

今回の調査では、溝や土壙ないし井戸は検出されたが掘立柱建物跡等の生活遺構は検出されず、調査地は集落縁辺部の様相を呈する。

今回の調査で検出した溝は水路と考えられる。調査区中央部を南東―北西方向に貫くもので、昭和初期作成の地形図に今回の調査区をあてはめると、地形図にある水路が今次調査検出の中世水路に重なるのがわかる。現在は区画整理がなされ戦前の地形図にある水路は街区に合わせて切り替えられているが、調査区壁の土層観察からも今回検出の中世水路の上に近・現代の水路が構築されている状況が観察できた。このことから、戦前から戦後しばらくまでは中世にできた水路に基づく地割りが残り、中世以来の景観が保たれていたものと推測される。

那　珂　73

―第147次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1262集

平成27年３月25日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目１番８号

印　刷　魚住印刷

福岡市博多区大博町8-20